第Ⅱ部門　　水辺の保全と活用を通した地域交流に関する実践的研究
～淀川愛好会の設立と活動を通して～

摂南大学工学部　正会員　　澤井　健二
摂南大学工学部　学生員　○谷　　浩志

1. はじめに

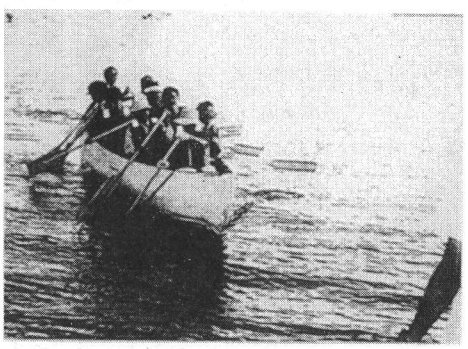
最近、全国的に多自然型川づくりが進められる一方、水辺の親水整備が普及しつつあり、人々が水辺に接する機会が増えてきた。近年、多くの河川はコンクリートで固められ、生態環境や親水性が失われたが、97年には河川法が改正され、環境が目的に加えられるとともに、住民参加の重要性が加わった。我々は水辺に親しむ行動を親水行動と呼んでいる。本研究では上・下流の交流や世代間の交流等の地域交流を図る市民サークル「淀川愛好会」を組織し、地域交流の活性化の実践的研究を試みた。

2. 淀川愛好会の設立

「淀川愛好会」は魚釣りやボート遊び、散策等、淀川に親しみつつ流域の歴史、文化を学び、河川敷の清掃等を通じて地域社会に貢献する目的で、また環境問題を考える若者を育てる学生サークルとして、97年4月に摂南大学内で発足した。発足当初の会員数は20数名だったが、97年12月に学内サークルから市民サークルに拡大を図り、現在では会員数も約200人になるまでになっている。

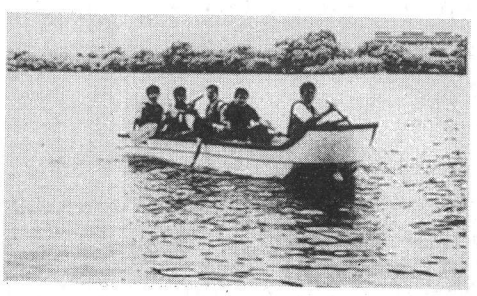
3. 淀川愛好会の活動

「淀川愛好会」の最大の特徴は学生が主体となっている点と親水行動を図る道具としてEボートと呼ばれる組み立て式のボート（写真－1、写真－2）を2艇所有している点である。Eボートとは交流(Exchange)、環境(Eco)、教育(Education)などのEをとって名付けられた全長8mの10人乗りボートである。このボートはワゴン車一台で運搬することができ持ち運びに便利である。



写真－1　ファルト型Eボート

Eボートは主に水辺遊びに使用しているが、河川環境を考えるにも有効であると思われる。例えばボートに乗船して水上から川を観察すると岸から川を観察するよりも環境問題を身近に感じる度合いが強いと思える。実際、学生や参加者などの意見を聞くと、水面から観察すると川の違う面が観察でき、川に対する意識が変わったという人も多い。



写真－2　積み重ね型Eボート

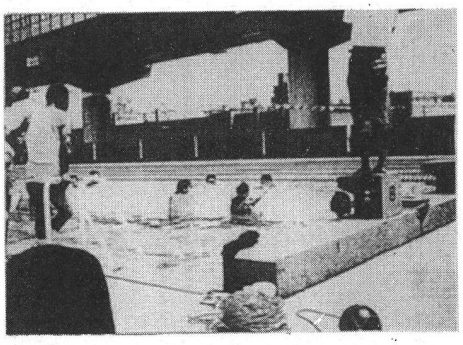
また毎年4月と7月に淀川の河川敷でバーベキューやEボートを用いての水辺遊び、河川清掃などを行っている（写真－3）。このイベントは船から淀川を観察してもらい、水辺の楽しさを経験してもらうと同時にゴミが投げ捨てられている淀川の現状を認識してもらい、参加者全員で河川敷の清掃を約1時間行っている。そしてこのような活動を通して淀川流域に暮らしている市民に淀川の環境や現状を体

Kenji SAWAI , Hiroshi TANI

験してもらい、市民が環境問題を行政任せでなく市民も参加して行政と協力し合うことの必要性を認識してもらっている。しかし現状では参加者が淀川愛好会の会員や知り合いの範囲に限定されており一般市民との交流が図れているとは言えないかも知れない。また本会でできている河川敷の清掃範囲は淀川全域に比べるとあまりにも小さい。しかし同じような目的をもった市民サークルがさらに数多く設立され、それらの団体が連携しあうことが環境改善の一つの方法だと思われる。

写真－3　河川敷でのバーベキュー

ところで、このような運動を展開していく中で、安全管理は不可欠の要素である。そこで淀川愛好会では98、99年の8月に大阪工業大学のプールで着衣泳の講習（写真－4）を開催した。このような講習を市民サークルの活動だけでなく、義務教育の一つとして学校の授業に取り入れれば子供の意識の向上に有効であろう。



写真－4　着衣泳

また、99年7月31日・8月1日には流域全域の幅広い交流を目的として、草津市の湖畔で琵琶湖・淀川流域水環境交流会を開催した。テーマは「活かそう水辺、つなごう流れ」である。今回は一泊二日のスケジュールで約200人の参加者を得て、水環境に関する講演・討論会・交流懇親会・競漕を行った。しかし桂川流域の参加者が集まらず淀川流域全域での交流を図ったとは言えない結果となった。また、競漕中にジェットスキーがコースに割り込んでくる事もあり河川にも標識などが必要ではないかと思われた。

その他にも、大和川で開かれたクリーンキャンペーンに参加してボート乗船や河川敷の清掃などを行い、地域交流センターが主催する全国Eボート大会にも毎回参加し、流域間の交流を行っている。

4. 淀川愛好会の資金と連携団体

運営資金は年会費３０００円(学生１５００円）を徴収するとともに、特定の研究課題の推進やイベントの企画について河川環境管理財団河川整備基金の助成を受けている。しかしこのような活動を促進しさらに発展させていくには、より安定した収入源を確保する手だてが必要であろう。例えば計画と実行は市民が行い、費用は行政が持つのも１つの形態ではないかと思われる。

また淀川愛好会は、「滋賀県環境生活協同組合」、「寝屋川青年会議所・ふるさと青年塾」、「松下電器産業労働組合・市民懇話会」、「ふるさ都・夢づくり協議会」、「地域交流センター・全国Eボート連携協会」等と協力し合い、地域連携・流域連携を図っている。

5. まとめ

淀川愛好会の目的である水辺の保全と活用を推進するためには地域の連携だけでなく、川の上下流の連携といった流域全体の連携が必要であり、全国各地でも流域連携が盛んに行われている。その交流を通じて我々は水質や景観、生態といった環境問題を認識し、川と人とのつながりのあるべき形を検討している。その為には情報の発信や提供といったネットワーク作りが必要であるとともに、安全の確保が必要不可欠である。

また行政側も市民の意見を取り入れ、子供たちの遊び場になるような川づくりを目指している。そして費用の面で行政からの協力が得られれば地域連携が図りやすいと思われる。